

Title	模倣による巡礼空間の創造：篠栗四国霊場の表象と実践
Sub Title	Creation of pilgrimage space by imitation : representation and practice of Sasaguri Shikoku sacred place
Author	中山, 和久(Nakayama, Kazuhisa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.65- 109
JaLC DOI	
Abstract	In Japan, there was travel over the pilgrimage course that was called 'Utsushi' in the whole country. 'Utsushi' is concisely a pilgrimage course created by imitating 33 sacred places of goddess of mercy in West Country or 88 sacred places in Shikoku Island in Japan. It is in the 19th century that they were created in succession in nationwide various places though the history of the 'Utsushi' pilgrimage is thought to go back before the 13th century in Japan. And, it takes pride in the deep-rooted popularity in Japan of the 21 st century called the irreligion and no belief. Why is it created, does it spread, and does dress still a lot of people to such a 'Utsushi' pilgrimage? In this text, I first examine the problem of what the 'Utsushi' is, and understand the historical development of the 'Utsushi' pilgrimage in Japan, then examine in detail the pilgrimage course of Sasaguri Shikoku sacred place as a example. And, I reconsider a creative technique that the human race uses while arranging natural environment and designing the existing space culturally. Finally, I clarify the principle of folk customs that generates the cosmology of the pilgrimage.
Notes	特集文化人類学の現代的課題II 第1部 空間の表象 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

模倣による巡礼空間の創造

——篠栗四国霊場の表象と実践——

— 中 山 和 久* —

Creation of Pilgrimage Space by Imitation: Representation and Practice of Sasaguri Shikoku Sacred Place

Kazuhisa Nakayama

In Japan, there was travel over the pilgrimage course that was called 'Utsushi' in the whole country. 'Utsushi' is concisely a pilgrimage course created by imitating 33 sacred places of goddess of mercy in West Country or 88 sacred places in Shikoku Island in Japan. It is in the 19th century that they were created in succession in nationwide various places though the history of the 'Utsushi' pilgrimage is thought to go back before the 13th century in Japan. And, it takes pride in the deep-rooted popularity in Japan of the 21st century called the irreligion and no belief. Why is it created, does it spread, and does dress still a lot of people to such a 'Utsushi' pilgrimage?

In this text, I first examine the problem of what the 'Utsushi' is, and understand the historical development of the 'Utsushi' pilgrimage in Japan, then examine in detail the pilgrimage course of Sasaguri Shikoku sacred place as a example. And, I reconsider a creative technique that the human race uses while arranging natural environment and designing the existing space

* 慶應義塾大学非常勤講師

culturally. Finally, I clarify the principle of folk customs that generates the cosmology of the pilgrimage.

Key words: pilgrimage, imitation, Utsushi, Sasaguri Shikoku, representation

1. ウツシ巡礼の研究

(1) 研究の目的

日本ではかつて一般にウツシと呼ばれる巡礼コース¹を巡る旅が全国各地域において行われていた。ウツシとは、ごく簡潔に言って、西国三十三観音霊場²または四国八十八ヶ所霊場³を模倣して創られた巡礼コースのことである。

中世以来、ウツシ巡礼は日本全国に1,000ヶ所以上誕生したとされ、「西国写」「新四国」などの表現を用いて西国巡礼や四国遍路との類縁性を強調するものが多いのだが、「新坂東」のようにウツシ巡礼のウツシもあり、五島列島の井桁ルルドのように海外巡礼のウツシまでもがある。

ウツシという発想は巡礼に限られるものでもなく、高知県発祥の「よさこい祭」は全国各地にうつされて札幌市のYOSAKOIソーラン祭りや七尾市の能登よさこい祭りなど数々の御当地ヨサコイ祭を生み出している。また、ウツシという発想自体も古く、すでに『日本書紀』の推古天皇20年条には「南庭に須弥山を築く」と見える。

一方、ウツシ巡礼は海外にもある。ポーランドのカルバリア・ゼブジトフスカはエルサレムを見立てた巡礼公園で、「ゴルゴダの丘」を中心に44の聖堂が立ち並んでいる。中国澳門のコタイ通りを「アジアのラスベガス」とするなど、景観に対する見立てや仮託の感情は世界中に見られ、ウツシの底流には時代や地域、民族の要請を超えた普遍的な意義も感じられる。

日本におけるウツシ巡礼の歴史は13世紀以前に遡ると考えられるが、

全国各地で続々と開創されたのは 19 世紀である。現在でも、津軽三十三観音霊場や小豆島八十八ヶ所霊場など、それぞれの地域名を冠した巡礼コースが各地に残っており、柏新四国霊場（東葛印旛大師講）のように年中行事として 1,000 人もの人々が一団となって巡礼しているコースや、篠栗四国霊場のように年間 100 万人が訪れるというコースもあり、無宗教・無信仰と言われる現代日本社会においてなお根強い人気を誇っている。

なぜこうしたウツシ巡礼は創造され、普及し、今もなお多くの人々をひきつけるのだろうか。人々はそらのウツシ巡礼にいったい何を求め、何を得てきたのだろうか。これらの問題の背後には、観光振興や住民参加、地域主導などの現代社会が取り組む課題に資する多くの着想が秘められているように思われる。歴史的にも聖地の原理は環境の保護へと結びついてきた。

本稿は、日本におけるウツシ巡礼の創造を踏まえ、ウツシ巡礼の重層的かつ複合的なコスモロジーの構成原理を解明し、日本人にとってのウツシ巡礼の意義へと迫るものである。

(2) ウツシ巡礼分析の視角

ウツシ巡礼の意義について僧侶や先達は、西国や四国を巡礼したのと「同じ功德」を得ることができる」と説明することが多い。

しかし、ウツシ巡礼が西国や四国と比較して地域の人口比に等しく巡礼者を集めている訳ではなく、また、ほとんどのウツシ巡礼者はいつか西国や四国を巡礼したいと考えていることなどから、僧侶らによる説明はあまり巡礼者などには受け入れられていないようである。

また、資金や時間、体力に余裕が無いために西国や四国を巡礼できない人々のために、あるいは支配者が領民の流出を防ぐために、代替として創られたとの説もあるが、移動の制限が解かれ、資金や時間に余裕ができ、

交通や飲食宿泊施設が整備され、同説の歴史的意義が薄れた現代においてもウツシ巡礼は行われている⁴。

一方、宗教学者らは巡礼の意義を巡礼地の持つ聖性から理解しようとしてきた。特別に靈験のある場所、すなわち聖地こそが巡礼の対象になるとする見方である。植島啓司は、こうした聖地の定義として「聖地はわずか一センチたりとも場所を移動しない。」「聖地はきわめてシンプルな石組みをメルクマールとする。」などの9項目を列挙している〔植島 2000: 5-6〕。

確かに、日本で巡礼の対象となっているのは、特定の神仏が祭祀されてきた寺堂や、聖人ゆかりの遺蹟である場合が多く、西国巡礼において巡礼の対象となる「札所」と呼ばれる33ヶ所の寺院⁵は、それぞれが独自に特筆すべき聖地としての長い歴史を有している。しかし本稿で扱うウツシ巡礼には、札所の移転という事態が頻繁に確認される上に、開創時の札所の選択にも恣意性が認められ、石仏など新造の聖物を安置した祠や民家が札所となっていることがごく一般的であるため、植島の聖地論は最初から適応が困難となってしまう。

こうした日本の巡礼の特性に対して、民俗学では柳田國男が「巡礼は日本では面白い形に発達している。（中略）近代は少なくとも何十個という霊場の数を繋ぎ合わせて、わざと目的を散漫にしようとした形が見えるのである。参拝の大きな意義はむしろ道途にあった。」〔柳田 1993: 210〕という理解を示し、聖地論の再検討を促している。

札所が神仏を中心に綿密に構成され、札所における儀礼が真摯に執行される以上、札所が巡礼において有する意味を軽視するのは行き過ぎだが、聖地という場所・空間に分析を限定してしまう危険性を明示した意義は大きい。

ここから、少なくともウツシ巡礼を含む日本の巡礼を分析するには、①札所、②札所と札所を結ぶ道、③札所の集合である霊場、の3局面一点・線・面一における聖性⁶を把握する必要があるとわかる。

(3) ウツシ巡礼と地方巡礼

ウツシ巡礼を最初に本格的な研究対象として取り上げたのは新城常三である〔新城 1964〕。新城は交通の全国展開を研究する過程で、各地に存在する西国巡礼や四国遍路「地方版」や、特定の限られた地域の住民が主として巡る「地方霊場」の成立に関心を向けた。

1973年には中尾堯が『古寺巡礼辞典』を、1975年には斎藤昭俊が『仏教巡礼集』を完成させ、ウツシ巡礼研究は新しい段階に進む。前者は実に105もの「地方巡礼」「地方霊場」を詳しく紹介し、後者は前者に収録されていない巡礼地をさらに45コース紹介した。

両書の刊行により巡礼研究は、西国や四国ばかりではなく、ウツシ巡礼を含む日本全国に展開した無数の巡礼コースへも進められ、多様な巡礼を分析する概念として「本尊巡礼」や「聖蹟巡礼」、「地方巡礼」といった数々の学術用語が創出された〔真野 1996〕。

「本尊巡礼」とは、観世音菩薩や不動明王といった特定の神仏を巡礼の礼拝対象とする巡礼で、西国のウツシ巡礼の数々がこれに該当する。すなわち、本尊と交流できる場所、あるいは本尊が出現した地への巡礼である。

一方、「聖蹟巡礼」とは、尊崇または思慕する人物の聖なる足跡をたどる巡礼で、弘法大師空海の足跡をたどるとされる四国巡礼をはじめ、法然、親鸞、日蓮などの高僧・聖人の歩いた行跡をたどる巡礼が各宗派において行われている。そして、四国のウツシにおいてはしばしば土砂が勧請されることから、これを足跡の移植と考えて、四国のウツシを聖蹟巡礼とする見方もある。

また、「地方巡礼」は、西国や四国のように全国から巡礼者を集める巡礼コースに比べて規模が小さく、ごく限られた地域の人々だけが巡礼を行う地域毎の小規模な巡礼コースを指しており、西国や四国の地方への移植および巡礼文化の伝播を問題とする際に主に用いられてきた。その内容は

大半がウツシ巡礼であるが、それにとどまらない。ただしこの概念は「地方」という言葉の曖昧さから、各研究者の問題意識により、中央/田舎、全国区/地元、オリジナル/コピー、モデル/ミニチュア、アマチュア/プロフェッショナル、定型/非定型、郷土/教義など様々な対立軸の中で用いられている。

なお、その後に展開した「地域的巡礼地」という用語は、「地方巡礼」概念に含まれる「限定された地域から巡礼者が訪れる」という点に着目して、巡礼コースの持つ信仰圏（巡礼者の出身地）の問題を解明するために設定された人文地理学的な分析概念で、「巡礼の発展」を分析するためなどに用いられている〔田中 2003〕。

(4) 民俗学の分析視角

このようにウツシ巡礼はもっぱら地方巡礼の一種として把握され、巡礼の宗教的な意義や、日本における巡礼の歴史的展開、それぞれの巡礼コースが持つ信仰圏などを研究する材料として取り上げられてきたわけであるが、そうした研究状況に対して民俗学から新しい地平を切り拓いたのが小嶋博巳である〔小嶋 1985〕。

小嶋は関東地方に数多く見られる四国のウツシ巡礼を取り上げることで、巡礼研究においては、それぞれの「巡礼の形態や性格に即したタイポロジカルな分析」が必要であり、地方巡礼は「地域や時代の諸条件の中で、単純にモデルに帰すことのできない独自の形態と存在価値とを培ってきた」と指摘した。

すなわち、地方巡礼、なかでもウツシ巡礼については、単に西国や四国といった全国的巡礼地からの地方化・小型化・易行化・矮小化・簡略化・縮小化という派生型で一概に把握することはできず、農村構造の変質や社会不安といった地域の歴史的背景や、死者供養や山遊びといった民俗的基盤に着目することなしには理解することができないというのである。

このため、小嶋の用いている「地方巡礼」という概念は、全国から巡礼者を集める「中央」に対しての「地方」という意味でもなく、地方への巡礼文化の伝播でもなく、各地域における独自の文化や事情に基づいて成立・展開した巡礼という意味であることがわかる。

本稿も小嶋の提示した問題意識の上に成り立っている。すなわち、人々が単なる自然空間である居住地域の環境を、人間の想像力と努力によって、どのように意味づけ、デザインし、巡礼の空間へと仕立て上げ、自らの生活と人生をマネジメントしているのか、それを全国津々浦々にまで普及したウツシ巡礼を事例として考えてみたいのである。

地方巡礼が問題としてきた地方性（信仰圏）も、各地方巡礼コースの開創者の意図を慮れば、必ずしも最初から狭い地域の住民による巡礼に限定するものではなく、むしろより多くの人々に巡って欲しいというのが真実であろう。また、簡略化・地方化という過程も、人々がうまく生きるために地元を自前でアレンジする自助的な過程として考えることができる。

そうだとすれば、地方巡礼の研究課題には、全国各地で巡礼コースを創造し活用する人々の叡智と営為が中心に据えられるべきである。なかでも、各地域住民による地元空間の設計と運営の仕方は重要な問題であろう。それが「ウツシ」という問題設定の根底にある。空間は「客体化」され「資源化」され、操作と交渉の対象となり、流用されて変容するのである〔太田 2001〕。

したがって本稿では地方巡礼や地域的巡礼地などの概念を採用せず、ウツシ巡礼という概念を用いて分析を進める。まず、分析の対象を明確にするため、2では「ウツシ巡礼」とは何かという問題を検討する。次に、3で日本におけるウツシ巡礼の歴史的展開について把握した上で、4からは篠栗四国霊場という一つの具体的な巡礼コースを事例として取り上げて「空間の表象」の動態を詳細に検討する。そして5において、人類が既存の自然環境をアレンジして活用しながら空間を文化的にデザインする創造

的な手法について再考したい。最後に、巡礼のコスモロジーを生成させる民俗の原理を明らかにする。

2. ウツシ巡礼とは何か

(1) 「ウツシ」の含意

本稿冒頭では「ウツシ」を西国または四国の「模倣」と略記したが、その「模倣」は日本語としてごく一般的な概念として用いている⁷。

『広辞苑』（第二版）では「模倣」を「或る個や集団によってなされた行動・態度・慣習・思想などのような表現としての刺激が、他の個や集団に働きかけて類似の表現をさせるように誘発させた場合に、後の表現とその過程を模倣という。」として、社会的流行や高度の文化活動を見る際に重要な視点であるとしている。別部分では「模倣」を「創造」と対置させてもいるが、『広辞苑』自身が説き、また本稿でも後に示す通り、模倣の先には新しいものを造り始めることが往々にして伴うものであることは忘れてはならないだろう。

ウツシ巡礼の説明としての「模倣」概念の周辺には「ミニチュア (miniature)」や「コピー (copy)」「縮小」「見立て」「移植」「勧請」「再現」「模写」「踏襲」といった表現があり、ウツシ巡礼が「ミニチュア巡礼地」「ミニチュア霊場」「ミニチュア版」「霊場のコピー」「(西国や四国の) 縮小版」「(西国や四国に) 見立てた霊場」などと表現されることもあるが、これらの周辺概念は個々に差異を含みつつも、ほぼ民俗語彙としての「ウツシ」の範疇に含まれてしまうのではないかと考える。

西国または四国の巡礼コースを模倣するには、空間（または景観）を模倣する際に必然的に生じる過程、および、日本の巡礼界ならではの独特な作法が幾つかあり、それらがウツシ巡礼の特徴を構成している⁸。「ミニチュア巡礼」という表現が頻繁に用いられるのは、ミニチュアが「鉛丹 (minium) で描く」を原義として、細密画・肖像画を意味するように、ウ

ウツシ巡礼がオリジナルの「縮小版」「縮写版」であることを表現している。また、全国各地にウツシ巡礼が創設されたことは、「書物を写して増やすこと」というコピー（複製）の原義を共有しており、各地のウツシ巡礼において「写」の文字がしばしば用いられることを裏づけている。

ただし、模倣の原義であるイミタチオ (imitatio) について中世ヨーロッパ世界で「キリストの模倣 (Imitatio Christi)」⁹ があったように、西国巡礼を再興したという花山法皇や四国遍路の開祖とされる弘法大師（空海）の巡礼の行為や精神を模倣する作法も重要である。

空間の模倣において重要な点は、オリジナル¹⁰をいかに連想できるかということである。つまり、模倣空間の利用者がオリジナル空間を身近に現実味をもって感じられるか、端的に「浸れるか」が重要な課題となる。そのために各種の過程や作法が案出され、駆使されてきたのである。

こうしたウツシの状況を初めて本格的に分析したのは近藤隆二郎である。工学の専門家としてウツシ巡礼の研究に長年取り組んでいる近藤は、ウツシ巡礼における模倣の過程を「移築プロセス」として把握し、構造化 (modeling)→定置化 (adapting)→成熟化 (reunifying) の3段階に分類した上で、第一の構造化、すなわち、参照する対象をそのまま移築するのが不可能であるがゆえに行われる単純化・システムモデル化で重視されるものとして、弘法大師信仰、巡拝（身体行為）、接待、88ポイント（寺）、景観構造（空間構造）、88握りの砂、88石仏の7点を指摘している〔近藤1996: 224-226〕。

この、近藤が抽象的に指摘した「構造化」、具体的にはオリジナルを象徴する7点の事物が、ウツシ巡礼における模倣、すなわち「ウツシ」で重要視される内容であり、その内容を理念的に把握すれば、さしあたって「写し」「移し」「遷し」「映し」などの方向性が「ウツシ」の含意として考えられる。実際にはこれらが相互に関連しながら現実の「ウツシ」行為を形成しているのだろう¹¹。

ウツシ巡礼を記述の面から検討してみても、「浅草辺西国写三十三ヶ所」「四国移上総八十八ヶ処」など、巡礼コースの名称としてオリジナルとする西国や四国に「写」や「移」を付す場合は多いが、「准西国稲毛三十三所」や「相模国準四国八十八ヶ所」のように「准」や「準」を付けることもある。これは、オリジナルに「なぞらえる」「依拠する」「似せる」「等しいものと見なす」ことを強調しているのだろう。

しかし最も頻繁に目にするのは、「高岡新西国 33 観音札所」や「向島新四国八十八ヶ所」のように、オリジナルの頭に「新」を付加する表現である。この「新」はもちろんオリジナルに対して「あたらしい」という意味なのだが、熊野神社をウツシた「新熊野」が「今熊野」ともされるように、巡礼地が現在新たに遷されて再現されたという意味を持つと考えられる。

新四国に関しては他に「島四国」や「地四国」という表現もある。島四国は島嶼にウツシた四国の意で、瀬戸内海の島々で用いられることが多い。地四国はウツシた先の土地である地元や地域性を強調した表現である。

なお、全国各地のウツシ巡礼の情報が札所の分布域を超えて広く流通するようになるにつれて、「小豆島霊場八十八ヶ所」や「知多四国八十八ヶ所霊場」、また本稿で取り上げる「篠栗四国霊場」のように、相互に区別をするため便宜的に札所が分布する地域の名前を冠することが多くなっている。

(2) ウツシ巡礼の類型

ウツシが具体的にどのようななされるのかは 3 で詳述するが、その前に巡礼におけるウツシの種類について見ておきたい。

近藤隆二郎はウツシ巡礼を設置する意図に着目して、Community 型（コミュニティの結合性を強めて存続させる）、Event 型（遊ぶ）、Themepark 型（巡礼を簡易に疑似体験できる装置をつくる）、Utopia 型（理想郷を身近に実現する）、の 4 つに類型化している〔近藤 1996: 224-

226]. 近藤は類型化の観点を創設意図としているが、むしろ人々がウツシ巡礼をどのように利用するのかという観点からの類型化と見たほうが良いだろう。

ウツシ巡礼も基本的には各札所への参拝を連続させる以上、札所間の距離によって利用や体験のあり方は大きく異なってくる。本稿では空間の設計と活用を問題とすることから、巡礼コースの利用に際しての移動距離による類型化を重視する。このウツシ空間の広がりや「巡礼の規模」や「札所が分布する範囲」「巡礼域」と言い換えることもできる。

理念的なウツシ空間は極小から極大まで無限であるが、現実にはウツシがなされる空間は幾つかの類型に整理できる。空間利用の仕方で大別すれば、足による移動の有無が第一義となる。そして、移動を伴う場合は、その移動に要する時間(空間に浸る時間)で体験に大きな差が生じる。これは分・時間・日という分類が適用できるだろう。巡礼としてのウツシを見る際には、移動に数日を要するコースだけを扱うのが常識的なのだが、堂宇や境内へのウツシが「ミニ巡礼」と呼ばれたり、想像(頭)の中で思いを馳せる精神活動¹²もあることから、人間の創造力を問題とする場合には、これらも分析の視野に収めることが必要だろう。

一方、空間創造の局面で見れば、ウツシ空間の規模の拡大に応じて、より多くの協力者による、より大きな尽力が必要となってくる。その際に重要なのは、人間の集団が社会的・政治的に整理される空間単位としての村や郡といった居住区画である。

以上を整理すると、巡礼空間の創造を分析するには、次の5つの類型を設定することができる。

①非移動・二次元型

西国の本尊を刷った版本や、四国の本尊御影(御姿)を貼り合せた屏風など、一つの物体の上にウツシが行われる場合。朱印帳(納経帳)や集印掛軸は各札所の本尊印や寺印を集めたものであり、一冊の帳面、一枚の絹

面へのウツシと見ることができる。創造という点では最も手軽であり、西国・四国の巡礼者の多くがこれを作る。もっぱら礼拝・鑑賞の対象として活用されている。

②非移動・三次元型

木喰五行が四国の本尊を刻んで納めた甲斐国丸畑の四国堂や、一つの須弥壇に西国の土砂と本尊像を並べた法眼寺(山形県藤島町)の仏間など、一つの場所・空間にウツシが行われる場合。活用は①と同様だが、創造するにはより多くの費用や労力を要する。

③移動・数分型

オリジナルの各札所の土砂を勧請して袋や敷石に納め、堂内や境内など全長数メートルから数百メートルの空間へ札所番号順に並べ配したもの。巡拝者はそれを一つ一つ踏み締めながら礼拝していく。地理的に見れば1ヵ所(1堂内、1区画内)だが、数分間に及ぶ身体の移動が伴う。一般に「お砂踏み」や「ミニチュア巡礼」と呼ばれ、ことに四国のウツシが多く、それらは「ミニ四国」とも呼ばれている。

創造は②よりも大変であるが、ほとんどは一つの寺院による開創であり、その寺院の運営を担う檀家や信徒、住職、職員など限られた集団の合意と資金だけで創造可能である。

各札所の本尊石仏や御前立ち像、本尊図幅などを祀り合わせ、花や供物、賽銭箱などを飾ることも一般的で、西浦不動無量寺(愛知県蒲郡市)では札所ごとに祠までが建てられている。北海道の真言宗寺院は境内に新四国を設置しているところが多く、春になると「お山開き法要」などの儀礼が執行される。

二重螺旋坂で巡拝できる通称「さざえ堂」(福島県会津若松市)や、岩槻大師(埼玉県さいたま市)のように地下仏殿に配して「戒壇巡り(胎内巡り)」を伴うものなど、巡拝体験を彩る工夫を凝らした建造が各地で見られる。

設営が比較的簡単であるため、年中行事や記念行事に活用されることも多い。今熊野観音寺(京都市東山区)では毎年9月21-23日に「四国霊場お砂踏法要」が修行され、関東三十六不動霊場(南関東地方)では10周年ごとの記念行事において主たる儀礼の一つとして実践されている。

④移動・数時間型

オリジナルをウツシた札所がより広域に配され、すべてを巡拝し終えるには数時間を要する場合で、ある程度の巡拝コースになっている。基本的に③と同じ構造を持つのだが、移動距離が長いため、その分「お砂」を踏むという感覚は薄れる。

御室八十八ヶ所霊場は仁和寺(京都市右京区)の裏にある成就山に小堂の札所を88ヶ所配したもので、所要約2時間。一寺院の境内にあることから、③の大規模型とも言える。

巡拝が数時間に及んで空腹を引き起こすため、接待や弁当開きなどの民俗が伴うことがある。大分県豊後高田市の夷谷新四国は中山仙境に配された石仏を巡るコースであったようだが、年に2回オセッタイと呼ばれる行事があり、旧香々地村の各隣保班や各家で祀る札所本尊や弘法大師の像を拝する巡礼が行われる。巡拝者は各拝所で五目御飯やうどん、菓子などを振る舞われ、一日を旧村内の巡拝で過ごす。

⑤移動・数日型

④よりもさらに広域へ札所が配されたもので、巡礼には数日から数週間を要するコース。数百kmに及ぶ広大なものまである。従来、「地方巡礼」として研究が重ねられてきた主な対象である。

広域にわたるため、開創には集団による合力が不可欠であり、札所を支える人々が巡礼者となって活用してきた歴史を持つ。

必然的に宿泊が伴うため、「善根宿」や「接待宿」の民俗が広く行われてきた。もちろん接待の慣行も見られる。5類型の中で最も複雑な活用状況が認められる。

「御国三十三観音」「郡内新四国」などの名前に見られるように、札所を分布させる範囲としては、ほとんどが近世社会における「国」「郡」「府」「村」の行政区画を利用しており、それに基づいた類型の細分化も可能である。

札所を分布させる設計には、行政区画などの人文地理的環境ばかりではなく、地形や自然景観といった自然地理的な環境も利用される。例えば、島を単位とする島四国の多くは四国と同様に島の沿岸部へと札所を配して、巡礼によって島を一周するようにデザインされている。半島や川筋、街道筋、湖の周辺、平野や盆地の縁辺に沿って配置されることも多い。これら景観による類型のさらなる細分化も可能である。

以下本稿では、上記ウツシ巡礼類型の中でも、比較的広い空間のデザインに関わる⑤を主題として扱い、それに該当する巡礼コースに焦点を当てて考察を進めていく。

3. 日本におけるウツシ巡礼の展開

(1) ウツシ巡礼の初期展開

一般に日本のウツシ巡礼は西国巡礼のウツシ¹³に始まると解されている〔浅野 1990〕。それは西国巡礼が日本における巡礼の最初であるとされることも無関係ではないだろう。

西国巡礼の史料上の初見は 13 世紀前半に成立した『寺門高僧記』で、その第四に行尊 (1055-1135) と覚忠 (1118-77) が巡礼したとの記録がある。また、15 世紀半ばに慧鳳が著した『竹居清事』には、養老 2 (718) 年に大和国長谷寺 (奈良県桜井市) の徳道上人が創始し、後に花山法皇が中興したとの伝説が見られる。

その西国三十三観音霊場をウツシた最初とされるのが坂東三十三観音霊場である〔清水谷 1971〕。ただし、都々古別神社 (福島県棚倉町) の観音像台座銘には、天福 2 (1234) 年に沙門成弁が「三十三所観音」を修行

して八溝山(現・坂東 21 番札所)で参籠したと記されていることから、すでに 13 世紀初頭には坂東巡礼が成立していた可能性があり、これが西国に匹敵する古さを示していることや、明和 8 (1771) 年に沙門亮盛が著した『坂東観音霊場記』が花山法皇による開創を説くことなどから、坂東巡礼は西国巡礼のウツシではなく、独自に成立した巡礼であるとの見解もある。

享徳 3 (1454) 年の『撮壤集』にある京都の「三十三所観音」や、長享 2 (1488) 年記の「秩父観音巡礼札所番付」(秩父巡礼 32 番法性寺蔵)に見える 33 ヶ寺、大永 6 (1526) 年銘の納札が残る最上三十三観音霊場も、一応は西国のウツシと考えられているがウツシの意図が存在した確証はない¹⁴。しかし、15 世紀半ば頃に成立した『康富記』には、勧進聖が西国の本尊の摺本¹⁵を授けている記述が見え、『補菴京華別集』には文明 16 (1484) 年に西国各札所の本尊を刻んで分霊を勧請し堂宇に安置したとあるので、ウツシの意図がすでに込められていた可能性は高い。

その後 17 世紀に入って江戸と大坂に三十三観音霊場が出揃うと、西国のウツシは全国に続々と開創されるようになる。全国的に見れば西国のウツシが圧倒的に多いが、オリジナルである西国巡礼の展開が四国遍路に比べて相当に早かったことに起因するのであろう。四国遍路が八十八ヶ所霊場として展開するのは 17 世紀に入ってからである。そうしたこともあって東北地方には新四国がほとんどなく、観音巡礼が極めて盛んである。

(2) 新四国の展開

西国に比べて出遅れた四国のウツシは 18 世紀から活発な成立を遂げる。本稿で取り上げる篠栗四国霊場も四国のウツシで 19 世紀に入ってから成立である。

四国のウツシは小豆島新四国(香川県)が最初とされ、貞享 3 (1686) 年の開創を伝えるが、実際に巡礼行為が盛んに展開されるようになるのは

19世紀に入ってからと見られている。三河新四国（愛知県）も寛永12（1635）年の開創と言うが、あくまで伝承の話である。歴史学的には筑前島郷新四国（福岡県）が古く、元文元（1736）年以前に開創された最初期の霊場と推定されている。

新四国の展開については未解明な部分が多く、本格的な研究はこれからであるが、新城常三がすでに研究に着手しており、その成果が新四国の展開を把握する際には貴重な目安となる〔新城1982: 1124-1128〕。以下にそれを整理して示す。

①17世紀

貞享3（1686）年の開創を伝える小豆島新四国（香川県）のみである。先述したとおり、歴史学的には検証が十分ではない。

②18世紀

正徳年間（1711-6）に甲斐一国（山梨県）へ新四国が成立したのを始めとして、新四国の開創が全国各地へと展開する。

享保年間（1716-36）以前に毛利藩（山口県）へ、享保12（1727）年に美濃苗木藩及細目・久田見付近へ、元文元（1736）年以前に安房（千葉県）へ、寛保3（1743）年に備中神島（二九キロ）へそれぞれ成立した新四国が最初期のものであろう。

江戸時代も半ばを過ぎ、宝暦期（1751-64）に入ると、江戸を中心に活発な創造が見られた。宝暦（1751-64）頃に江戸（御府内）（東京都）、宝暦4年に久慈郡（茨城県）と佐原市・下総町等（千葉県）へそれぞれ新四国が成立した。これが最初の新四国開創ブームとされる。

その後も新四国の開創は全国で相次ぐ。明和4（1767）年に新治郡出島村（茨城県土浦市・石岡市等の一部）、明和8年以前に周桑郡（愛媛県）、明和期（1764-72）頃に上野（栃木県）、安永4（1775）年以前に相馬（茨城県）と美濃郡浜田（島根県）、天明2（1782）年に上州東（群馬県吾妻・群馬・榛名・碓氷郡等）、天明4年に淡路（兵庫県）、天明4年以前に武射郡

(千葉県), 天明5年に海上郡・匝瑳郡等(千葉県), 天明(1781-9)頃に豊後西国東郡(大分県)と相模准四国(神奈川県藤沢・茅ヶ崎・鎌倉市等), 天明5~寛政4(1785-92)年に上総東部(千葉県), 寛政9(1797)年以前に備中笠岡(岡山県), 寛政11年に日向高鍋・佐土原藩(宮崎県)へ成立.

③19世紀

十返舎一九が文政4(1821)年に著した「四國徧路獨案内」(『方言修行金草鞋』14編)などにうかがえる四国遍路の賑わいとも相まって, すでに新四国の開創は全国的によく知られた営み(一種の流行)となっていたようで, 19世紀には雨後の筍のように各地で開創される. ただしその札所配置圏は18世紀に比べて全体的に小規模となったようである.

享和2(1802)年, 足立郡(東京都・埼玉県). 文化4(1807)年, 大島(愛媛県今治市). 同5年以前, 東葛印旛(千葉県). 同4-6年, 船橋・八千代市等(同). 同6年以前, 埼玉郡(埼玉県). 同7年, 知多(愛知県). 同8年以前, 猿島郡(栃木県). 同9年, 吉野・宇智郡等(奈良県), 同10年以前, 秋穂(山口県). 同12年以前, 成田北部(千葉県). 同13年以前, 鹿島郡(茨城県). 文化年間(1804-18)頃, 佐渡(新潟県), 稲敷郡東村・桜川村(茨城県), 高麗(埼玉県). 文政(1818-30)以前, 可児郡(岐阜県), 端山(徳島県美馬郡). 文政元年, 北相馬郡利根町他(茨城県). 同2年以前, 佐野・葛生町他(栃木県), 佐久郡(長野県). 同3年以前, 久留米藩領内(福岡県). 同6年, 多摩郡(東京都). 同6年以前, 野田(千葉県). 同8年, 藤代・牛久町他(茨城県), 諫江(長崎県). 同10年以前, 成田市南部外(千葉県). 化政期(1804-30), 西栗倉(岡山県). 文政年間(1818-30), 佐倉・印旛(千葉県).

以下は天保年間(1830-44)の開創である. 平郡(千葉県), 加茂(岡山県), 新庄(山形県), 遠田(島根県), 赤磐(岡山県), 出雲(島根県), 幡羅郡(埼玉県), 児島(岡山県), 武蔵国(東京都・埼玉県), 篠栗(福

岡山).

この文化・文政・天保年間の19世紀前半が新四国開創の最大のブームとも言われるが、以後も新四国の開創は相次いでおり¹⁶、印象としては、むしろ規模は縮小しつつも数は増加しているのではないかと思われる。北海道には「新四国霊場」が極めて多いものの、それは寺院の境内に88体の石仏を配したミニチュア巡拝霊場のことである。

ところで、現在これらの新四国霊場のうち、小豆島・知多・篠栗が「日本三大新四国霊場」と呼ばれている。いずれも、大阪、名古屋、福岡という大都市に近く、都市民が憩う自然が豊かである。日常生活空間から隔離されつつも訪れることが困難ではないほどに近い場所は、供養の現場として適するといった特徴も共通している。これらは江戸・東京に対して秩父三十四観音霊場が持っている特徴とも同じであると考えられる。

4. 篠栗四国霊場の表象と実践¹⁷

(1) 篠栗四国霊場の概要

本稿では日本三大新四国霊場と呼ばれる新四国の一つ、篠栗四国霊場を事例として模倣による巡礼空間の創造を考察する。同霊場は現在、全国から年間100万人¹⁸を集めるとまで言われるほど著名な巡礼コースである。

篠栗霊場は福岡県の福岡市に東接する篠栗町に展開している。同町は杉の植林が盛んでその7割を山林に覆われて緑が豊かな上、至る所に清水が流れて大小の滝を形成し、春には新吉野と呼ばれる地に桜が咲き乱れるなど、風光明媚な景勝地として知られている。

篠栗町旅館組合青年部が2005年に制作し篠栗町観光協会が100円で販売している「ささぐり四国霊場巡拝図」に従って札所の一覧を示したのが表1である。

札所は町内の東側、田中・高田・金出・萩尾・山手・城戸・山王・上町・中町・下町の10の集落に分布しており、田中の1ヶ所を除いて旧篠

表 1 篠栗四国霊場札所一覧表

札番	札所名	本尊	地区	札番	札所名	本尊	地区
1	南蔵院	釈迦如来	城戸	45	城戸ノ滝不動堂	不動明王	城戸
2	松ヶ瀬阿弥陀堂	阿弥陀如来	松ヶ瀬	46	岡部薬師堂	薬師如来	岡部
3	城戸釈迦堂	釈迦如来	城戸	47	萩尾阿弥陀堂	阿弥陀如来	萩尾
4	金出大日堂	大日如来	金出	48	中ノ河内観音堂	十一面観音	中ノ河内
5	郷ノ原地蔵堂	地藏菩薩	郷ノ原	49	雷音寺	釈迦如来	萩尾
6	小浦薬師堂	薬師如来	小浦	50	郷ノ原薬師堂	薬師如来	郷ノ原
7	田ノ浦阿弥陀堂	阿弥陀如来	田ノ浦	51	下町薬師堂	薬師如来	下町
8	金剛の滝観音堂	千手観音	丸尾	52	山手観音堂	十一面観音	山手
9	山王釈迦堂	釈迦如来	山王	53	桐ノ木谷阿弥陀堂	阿弥陀如来	桐ノ木谷
10	切幡寺	千手観音	丸尾	54	中町延命寺	不動明王	中町
11	山手薬師堂	薬師如来	山手	55	桐ノ木谷大日堂	大通智勝佛	桐ノ木谷
12	千鶴寺	虚空蔵菩薩	郷ノ原	56	松ヶ瀬地藏堂	地藏菩薩	松ヶ瀬
13	城戸大日堂	十一面観音	城戸	57	田ノ浦栄福堂	阿弥陀如来	田ノ浦
14	二ノ滝寺	弥勒菩薩	中ノ河内	58	大久保観音堂	千手観音	大久保
15	妙音寺	薬師如来	金出	59	田ノ浦薬師堂	薬師如来	田ノ浦
16	呑山観音寺	千手観音	呑山	60	神変寺	大日如来	城戸
17	山手薬師堂	薬師如来	山手	61	山王寺	大日如来	山王
18	篠栗恩山寺	薬師如来	上町	62	遍照院	十一面観音	上町
19	篠栗地藏堂	地藏菩薩	上町	63	天狗岩山吉祥寺	毘沙門天王	御田原
20	鶴林寺	地藏菩薩	中ノ河内	64	荒田阿弥陀堂	阿弥陀如来	荒田
21	高田虚空蔵堂	虚空蔵菩薩	高田	65	三角寺	十一面観音	御田原
22	桐ノ木谷薬師堂	薬師如来	桐ノ木谷	66	観音坂観音堂	千手観音	金出
23	山王薬師堂	薬師如来	山王	67	山王薬師堂	薬師如来	山王
24	中ノ河内虚空蔵堂	虚空蔵菩薩	中ノ河内	68	岡部神恵院	阿弥陀如来	岡部
25	秀善寺	地藏菩薩	山手	69	高田観音堂	聖観音	高田
26	薬師大寺	薬師如来	荒田	70	五塔ノ滝	馬頭観音	五塔ノ滝
27	金出神峰寺	十一面観音	金出	71	城戸千手観音堂	千手観音	城戸
28	篠栗公園大日寺	大日如来	下町	72	田ノ浦拝師堂	大日如来	田ノ浦
29	荒田観音堂	千手観音	荒田	73	山王釈迦堂	釈迦如来	山王
30	田ノ浦斐玉堂	阿弥陀如来	田ノ浦	74	城戸病奪り薬師堂	薬師如来	城戸
31	城戸文殊堂	文殊菩薩	城戸	75	紅葉ヶ滝薬師堂	薬師如来	郷ノ原
32	高田観音堂	十一面観音	高田	76	萩尾薬師堂	薬師如来	萩尾
33	本明院	薬師如来	田中	77	山王薬師堂	薬師如来	山王
34	宝山寺	薬師如来	郷ノ原	78	山手阿弥陀堂	阿弥陀如来	山手
35	珠林寺薬師堂	薬師如来	金出	79	補陀洛寺	十一面観音	下町
36	天王院	波切不動明王	呑山	80	田ノ浦観音堂	千手面観音	田ノ浦
37	高田阿弥陀堂	阿弥陀如来	高田	81	二瀬川観音堂	千手観音	二瀬川
38	丸尾観音堂	千手観音	丸尾	82	鳥越観音堂	千手観音	鳴瀬
39	延命寺	薬師如来	上町	83	千手院	聖観音	御田原
40	一ノ滝寺	薬師如来	山手	84	中町屋島寺	千手観音	中町
41	平原観音堂	十一面観音	平原	85	祖聖大寺	聖観音	郷ノ原
42	中ノ河内仏木寺	大日如来	中ノ河内	86	金出観音堂	十一面観音	金出
43	明石寺	千手観音	鳴瀬	87	弘照院	聖観音	金出
44	大宝寺	十一面観音	鳴瀬	88	大久保薬師堂	薬師如来	大久保

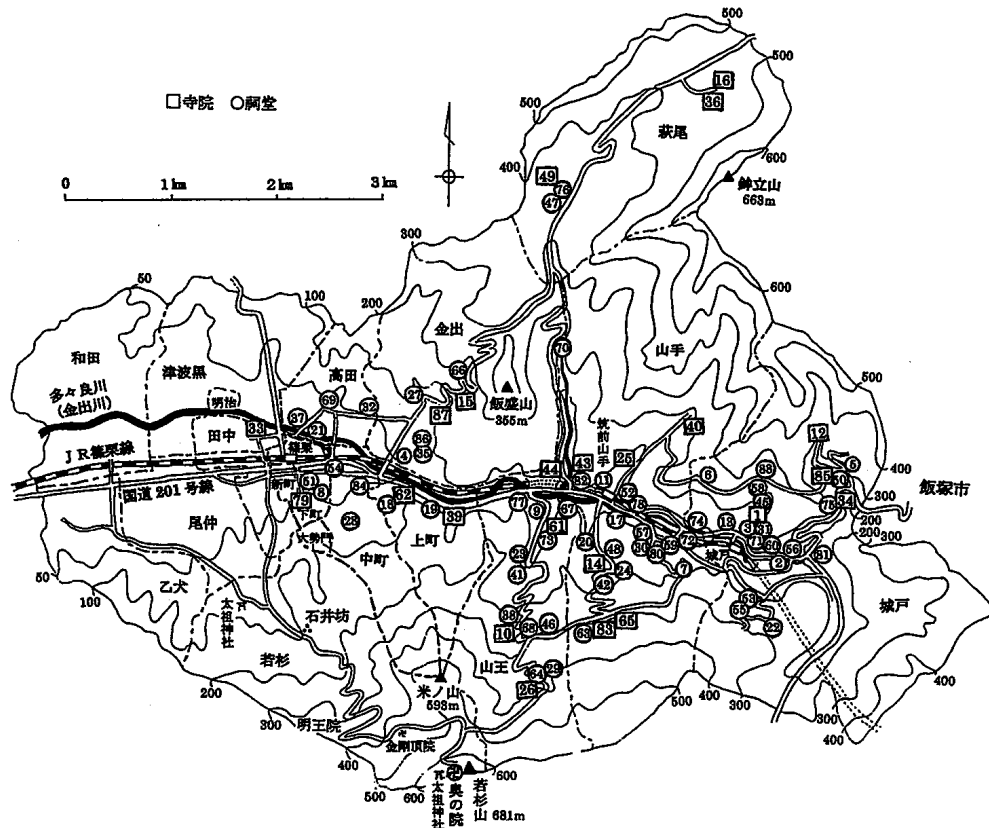


図1 篠栗四国霊場札所分布図

栗村にある¹⁹。札所番号とは無関係に配置されているため(図1参照), 札所番号の順に巡る巡礼者はほとんどいない²⁰。

一般的にはもっとも西に位置する田中の33番札所から巡礼を始める。福岡方面から篠栗へ至る入口となっており、明治37(1904)年からは福岡から延びる鉄道の篠栗駅が最寄りに設置されている。

観光協会が推奨している効率的な巡礼順を札所番号で示すと33→21→37→69→32→4→35→86→27→87→15→66→49→36→16→76→47→70→44→43→82→11→25→40→52→78→17→20→48→14→24→42→30→57→80→59→53→55→22→2→56→81→75→34→5→50→85→12→88→58→6→13→3→31→1→45→71→60→74→72→7→65→83→63→29→奥ノ院→26→64→46→68→10→8→38→41→23→73→61→9→67→77→39→19→62→18→84→28→54→51→79となる。

全行程は約 40 km で、比較的小規模な巡礼コースである。徒歩であれば全ての札所を一巡するのに 2 泊 3 日前後を要し、週末のハイキングにも利用されている。しかし最近マイクロバスやマイカーを利用して交通不便な札所を省略しつつ 1 泊 2 日で巡る人々が多いという。

(2) 篠栗四国霊場の発願

篠栗霊場の創造は、担い手の別に細かく見れば、発願→開山→創設という過程に分類できる。

最初に篠栗霊場の創造を発願したのは慈忍という宗教者であるとされている。

慈忍がどのような人物であったかについての確たる史料は未だ発見できていないが、諸伝承によれば、慈忍は姪ノ浜(現福岡市西区)出身の尼僧で、本四国を巡礼した帰途に篠栗を通り掛かり、当時村で流行していた疫病の平癒を祈願するため(または本四国巡礼を満願した御礼のため、または弘法大師の教法を伝道するため)に、天保 6 (1835) 年に新四国創造を発願したという。

慈忍が尼僧であり、かつ本四国の巡礼を経験し、弘法大師信仰を教導しつつ新四国の石仏を刻んだことから考えると、天保 5 (1834) 年に全国各地で弘法大師一〇〇〇年忌が盛大に祝われたことが主たる契機ではなかったかと思われる。

慈忍は城戸の平家岩に草庵を結んで安徳寺²¹と称し、本四国の各札所本尊を象った石仏を刻むことに着手したが、20 体しか造顕することができなかったという。これは 1~6, 10, 12, 13, 22, 28, 31, 34, 35, 37, 53, 58, 71, 74, 88 番札所であり、1 番から順になっていないのは城戸の大久保に 88 番の大窪寺を充てたいなどの施主の要望に従って作製していたためと思われる²²。この 20 体に、既存の祠堂 4 ヶ所の本尊を 45, 56, 60, 83 番札所に充当し、城戸地区を中心とした 24 ヶ所の霊場を作り上げた。45

番に関しては慈忍が籠った平家岩屋を岩屋寺（本四国 45 番）に見立ててのことと思われる²³。

しかし慈忍はこの段階で行方不明となり、新四国霊場の開創は未完に終わった。本四国の各札所本尊 88 体を全て造顕する計画であったとは思いますが、実際に造られたのは 20 体のみであったようだ。彼女は事業の困難さに耐え兼ねて出奔したとも、駆け落ちしたとも伝えるが、あるいは本人としてはそれで一応の満足を得ていたのかもしれない。

なお、これらの石仏に本四国の該当札所から本尊分霊を勧請したかどうかは定かではない。

慈忍の手になるとされる石仏は「天保仏」と呼ばれており、舟形後背に「一番」などと各札所番号が陰刻されているという特徴を有している。

(3) 篠栗四国霊場の開山

未完の新四国開創事業を引き継いだのは藤木藤助という人物である。嘉永 3 (1850) 年、藤助は慈忍の志を継いで新四国の完成を発願し、独力で残りの本尊仏を刻み始めた。17 体を完成させて田ノ浦と山手を中心に札所を作ると、有志の援助者も現れ、5 年後の安政 2 (1855) 年 3 月には足りなかった 64 体の石仏を完成させることができた。ここに 88 ヶ所の札所がすべて揃ったのである。

同年 5 月、藤助は 5 人の仲間を連れて本四国を巡礼し、行く先々の札所から境内の土砂²⁴を一部授かっては布袋に入れて持ち帰り、それぞれ札所番号に該当する札所へと配納した。残念ながら現在これらの土砂はほとんどの札所で行方不明である。大半は本尊石仏を安置する祠堂を建立した際に建築物の基礎部分や敷地へと埋納したとのことだが、石仏の台座上部の石仏を置く場所へ穴を穿って納めたのが札所移転や改築の際に台座とともに失われたという話もある。幸い 58 番では堂宇改修の際に守堂者の家に伝わる話どおりに本尊下から壺が発見され、中に砂礫が確認された。壺

は凝った造りで梵字を施しており、開創当初は石仏と一緒に丁重に安置されていたことが伺える。

ともかく霊場を完成させる事業を成し遂げたことから、藤助は篠栗四国霊場の「開祖」と崇められている。明治26(1893)年には高さ約3mという大きな銅像も建てられた。「得忍」とも言われるのは、慈忍を継いだという意味であろうか。

ここで重要なのは藤助が、慈忍と異なって、地元の間人であるということである。藤助は篠栗村中ノ河内の金澤家に生まれ、田ノ浦の藤木家の養子となった。製粉や馬喰を生業としたとも伝えるが確証はない。生来体が弱く、本四国を10回以上は巡礼したという。若杉山石井坊の賢貞大僧正に師事して真言密教の復興を図ったとも伝える。現存する最古の篠栗霊場地図と見られる「新四國八十八箇所巡拝略圖」も石井坊が所蔵する一枚である。

篠栗霊場成立の背景には若杉山をめぐる信仰状況も影響したと思われる。若杉山は宝満山(竈門山)修験峰入り宿泊地で石井坊や金剛頂院があったし、真言宗伝持第五祖である善無畏三蔵や弘法大師が若杉山で修法したという伝説も元禄時代にすでにあった。石井坊は慶長5(1600)年、藩主の黒田長政が太祖神社の社務として宝満山より石井坊有弁僧正を迎えて再興。本尊は弘法大師作大日如来で、脇仏に智証大師作の不動尊と地藏尊があったという。

(4) 篠栗四国霊場の創設

このように慈忍と藤助が開いた篠栗の霊場ではあるが、実際に石仏を篠栗の各地へと配置し、それを護持して札所となし、人々が巡礼できるように霊場を創設したのは、地元篠栗の住民である。なかでも中心となって慈忍と藤助を支援したのが「世話人」と呼ばれた、田ノ浦の平井清七、山王の有限文助と有限善次郎、城戸の桐生利平、中ノ河内の村瀬新平、篠栗町

部の荒巻幸右衛門の6名である。

本四国各札所本尊の石仏が造顕されるようになった当初から、これらの石仏の引き受け手は容易に見つからなかったという。神仏を祀ることは加護を頂くという側面もあるが、適切に祀らなければ祟りの恐怖があるので躊躇せざるを得ない。また、篠栗は檀家寺を浄土宗または浄土真宗とする住民が多いので、宗教観の違いが影響したのかもしれない²⁵。結局、世話人の縁故に頼る設置となったようで、配置が札所番号の順にならなかったばかりか、1ヶ所に複数の石仏を合わせ祀っていた札所も多かった。一戸ではなく複数の家々で祀る札所もあった。地元の祭祀願主全般としては、観音や薬師、地蔵などの神仏に対する守護・利益信仰の方が強く、新四国として弘法大師を祀るという意識は一部を除いて希薄であったようだ。

世話人たちには、本四国の4ヶ国に準じて篠栗・高田・金出・萩尾の4ヶ村²⁶内に順番通り配置する構想もあったというが、既に多くの札所が順不同のまま配当されており、祭祀願主としても希望の札所本尊を護持したい気持ちが強く、合祀を解消するためにも順序不同はやむを得ないことになったという。打ち始めの33番札所だけ田中地区にあるのもこうした事情からであろう。もっとも目印として「阿波国」などと本四国に対応する地名を刻む石造道標は幾つかの札所で見ることができる。

石井坊蔵の「新四國八十八箇所巡拝略圖」には札所が37ヶ所明示され、すでに巡礼のルートが書き込まれている。起点は明示されておらず、篠栗村内のどこから始めても良いように書かれている。道順は全体として右回りを描くように巡礼する円環構造の行程を成している。

現在、篠栗霊場の特質として地元篠栗の人間は基本的に篠栗霊場を巡礼しないことが挙げられるが、創設した当初は全国各地の新四国霊場と同様に地元住民が巡礼していたと思われる。それを裏づける史料は今のところないが、現在も守堂者の集まりで年に1回の巡礼が続けられているので、おそらくは札所を管理する者が中心となって地区ごとの集まりなどで年中

行事的な巡礼が行われていたと推測される。現在の札所名は、例えば37番「高田阿弥陀堂」のように、札所のある集落名と、札所の本尊名を組み合わせたものが多いが、それも地元の人々にとってのわかりやすさを強調した表現と考えられる。

(5) 篠栗四国霊場の展開

開創から大正時代にかけては合祀状態が解消されて各札所本尊が固有の場所で単独に祭祀されるようになる展開期である。明治22年には札所が47ヶ所へ増加し、明治27年には56ヶ所、大正期に入るとようやく88ヶ所となって1札所1本尊の体制が確立した。この背景には篠栗村外からの巡礼者の増加という現象があったようである。つまり、巡礼者が増加することで、札所では賽銭や供物、納経料のほか、土産物販売や宿泊提供などによる収入が増加したため、生活の足しとして分家や嫁入りの際に持たせたり、利益を見込んだ人が札所の権利を購入したりといった事態が生じたのである。

篠栗は大都市・福岡に近接した景勝地であったため、都市民の保養地としての需要も満たしたとは思われるが、明治17(1884)年の弘法大師1050年御遠忌による大師信仰の昂揚が新四国への巡礼を促したとも考えられる。明治22(1889)年に世話人の荒巻幸右衛門が発行した「篠栗霊場案内図」は、石井坊の地図が南を上にして描かれていたのに対して東を上にして手前に福岡市に近い田中を位置させており、加えて「福岡縣糟屋郡篠栗」と大書されていることから、篠栗住民ではない人々、特に福岡・博多方面の人々を対象として作成されたことが想像されるのである。

明治24(1891)年には篠栗と飯塚を結ぶ峠道の本格的開削が完成し、炭鉱で沸いた筑豊の坑夫らも篠栗巡礼に訪れたという。明治37(1904)年には、外部の人々を篠栗へと誘う「篠栗四国導和讃」も作られている。

明治31(1898)年に藤喜八郎と桐生源四郎が幹事となって守堂者の集ま

りである「金剛会」を設立したのも村外巡礼者の増加に対応したものと思われる。藤喜八郎は後に篠栗村長(1904-08年)となる人物で、桐生源四郎は先に篠栗霊場を調査して「明細帳編入願」(1894年)を作成し、福岡県知事に提出している。この両名の活躍によって、明治32(1899)年、高野山(和歌山県)から南蔵院が篠栗霊場の本寺(霊場本寺)に迎えられ²⁷、その住職として若き林覚運(1875年生)が高野山本覚院から招聘されたのである。43番に高野山支部が置かれたのもこの後まもなくのことと思われる。

なお、それまで各札所は札所番号または本四国と同じ名前と呼ばれていたのだが、1番札所が南蔵院となったことで、以後は各札所が本四国と異なる独自の名称を名乗る傾向が見られるようになり、現在に至っている。特に守堂者が息子や孫を得度させて札所を寺院となしたところではその傾向が著しい。

林覚運は霊場本寺の住職として篠栗霊場の布教に邁進した。早朝に出掛けては夜遅く帰宅する毎日であったという。覚運とともに布教に従事したのが62番の西義観であった。義観は明治33(1890)年に62番を「遍照院」となし、弘法大師の一代記を幻燈で上映し、占いで多くの信者を獲得するなど、精力的に活動した。

(6) 篠栗四国霊場の巡礼者

覚運と義観の二人三脚の布教によって、篠栗霊場の知名度は飛躍的に上がり、村外の住民が続々と巡礼に訪れるようになった。ウツシ巡礼の多くは基本的に地元民のための巡礼コースであり、他所の地域住民が巡るものではないのだが、篠栗では圧倒的に余所者が多いのも、二人の努力と、二人を支えた世話人たちの尽力によるものである。

もっとも、外部巡礼者の増加には、明治37(1904)年に国鉄の篠栗線が吉塚駅から篠栗駅まで開通したことや、明治38(1905)年に日露戦争が終

結して全国的に巡礼が興隆を迎えたこと、隣接する博多と筑豊炭田が経済的に発展したことなどが背景にある。花見や娯楽、嫁探しを兼ねての巡礼もあったようだ。

こうして篠栗霊場は、大正期には既に巡礼者が年間十数万人に及んだという。「日本三大」という評価もこうして生まれた。山口県の小野田大師講など、貸切列車で巡礼に訪れる団体が幾つもあった。現在も 100 名規模の団体巡礼が外部から訪れるウツシ巡礼は日本で篠栗が唯一ではないだろうか。

巡礼者は縁の札所に弘法大師や地藏菩薩、不動明王などの石仏を数多く奉納した。多くは無銘なのだが、銘のあるものを見ると「博多」「粕屋」「鞍手」「嘉穂」が多く、「飯塚」「宗像」「小倉」「北九州市」「遠賀郡」などの文字もある。やはり、近隣周辺市町村からの巡礼者が多いことがわかる。

奉納された仏像には年忌供養を司る十三仏や子供の霊を守護する地藏菩薩の像が多いことから、篠栗霊場も他の巡礼コースと同様に供養の場所、先祖の加護を念じ、逆縁の悲しみを癒す場所とされたのだろう。十三仏は団体巡礼の先達の指導による奉納が多いようだ。

覚運と義観の布教が弘法大師信仰に重点を置いたこともあり、篠栗霊場へは大師信仰を持つ人々も多く訪れた。弘法大師修行の伝説を持つ若杉山の「奥ノ院」が篠栗霊場の札所として巡礼されるようになったのもこの頃からと思われる²⁸。若杉地区（旧勢門村）では大正 10 年代に「若杉高野山」構想のもと金剛頂院などを再建。現在も奥ノ院の院守は若杉地区から任ぜられ、若杉霊峰会が守堂している。

奥ノ院は 29 番より 2 km ほどの急な登り坂を経た若杉山山頂にあり、悪人は瘦せていても通れないという「挟み岩（袖摺岩、おとがめの岩）」などの嶮を鉄鎖頼りに越える難所である。挟み岩の先の霊窟には弘法大師が独鈷で穿って得たという霊水「独鈷水」が湧いており、泉の真上に弘法大師が本尊として祀られている。湧水は万病平癒の霊水とされ、持ち帰る人

が多い。

このように札所番号を持たないが篠栗巡礼者が参拝する寺院や祠堂は一般に「バンガイ(番外)」と称されるが、本四国の番外札所をウツシた札所という意味ではなく、あくまでも篠栗霊場の番付札所に対しての番外という意味である。多くは「拝み屋さん」と呼ばれる霊能宗教者が創設または運営に携わっており、その多さと盛衰が篠栗霊場の一大特徴を成している。ちなみに本四国の番外札所のウツシについては、十夜ヶ橋が87番の境内に、鯖大師が38番の境内や61番の脇にある。

(7) 篠栗四国霊場における儀礼

篠栗霊場の巡礼者の振る舞いは基本的に本四国と同じである。それは巡礼者を引率指導する先達が本四国を何度も巡礼したベテランであることや、藤助をはじめとする篠栗村民の中にも本四国を巡礼した者が多かったことに起因するのだろう。

6番をはじめ幾つかの札所には本四国と同じ御詠歌を刻む奉納扁額が残されていることから、古くから本四国と同じ儀礼が執行されていたと考えられる²⁹。現在も、巡礼者が各札所において奉納している勤行は、多くが本四国でのそれと同じである。広く利用されているガイドブックにも、本四国で行われている勤行次第が掲載されている〔井上1993, 平幡1976, 1993〕。

巡礼者の格好は、白衣(または笈摺)に白い帽子、金剛杖が定番である。これも本四国と同じである。白衣や笈摺の背中には「南無大師遍照金剛」と大書してあり、「同行二人」と添え書きしているものもある。しかし、現在、金剛杖は實際上ほとんど必要でない上、バスやマイカーの乗り降りでは邪魔になることから、初めから持たない巡礼者も多い。巡礼の途中で札所に置き忘れてしまう巡礼者もかなりいる。また、本四国で多い笠の着用は、篠栗ではあまり見られないが33番などでは販売している。こ

うした巡礼グッズはいずれも本四国で販売しているグッズを模倣して近在の仏具業者が製造しているものを仕入れているようだ。

朱印も本四国に倣った形式で存在する。ただし毎年のように来る巡礼者や団体行動する巡礼者はほとんど朱印を受けていない。

また、本四国で盛んな接待や善根宿も、現在はほとんど見られないが、かつては盛んであったという。篠栗住民にとっては外から巡礼者が来ることで交流の機会となし、「山手組御接待所」など書いた幟を立て、みんなで餅をついては巡礼者に振る舞った。巡礼者にとっては地元以外の集落を巡ることによる交流があり、4番の饅頭や88番の飴湯といった名物接待を毎年楽しみにして篠栗へ詣ったという。現在も5番で手提げ袋の接待があり、54番でも大師の命日に飴を接待している。筆者もかつて道中で5,000円の接待を受けるなど、接待は細々とではあるが続けられている。

一方、善根宿は巡礼者が少ない頃はあったようだが、巡礼者が多く訪れるようになった大正時代にはすでに幾つかの旅館があり、昭和時代には篠栗の重要な産業として成り立っていた。ただし、満員で泊まれずに野宿した巡礼者も多かったようで、34番下の水子大仏の台座下に設けられた部屋は、そうした巡礼者が雨露を凌げるようにと設けたものだという。

篠栗でも巡礼者は本四国と同じに「御遍路さん」と呼ばれている。昭和24(1949)年に町内各地に設置された石製道標にも「へんろ道」と陰刻されている。道標の最上部に方向を指差した手型が浮き彫りにする様式もウツシカ偶然か不明だが本四国の道標と同じである

(8) 篠栗四国霊場の戦後

戦後は覚運の息子・覚雅、孫の覚乗と霊場会や行政、旅館組合などが一致協力して篠栗霊場を運営し、巡礼者の増加に拍車をかけた。具体的な活動は寺院が主導となっている。

各札所には無数の石仏が奉納されているが、新しい神仏像は寺院の募集によって奉納されている。34番や36番など同じ形態の水子地藏像群が境内を埋め尽くすように整然と並んでいるのはその代表例である。ただし、3番の境内にずらりと並ぶ同形の不動明王や弘法大師の像は拝み屋か霊能者かが信者に因縁切りか何かで上げさせたものではないかという。

いずれにせよ篠栗という狭い土地に100を超える札所が集まり、それらの境内や路傍、山中にまで随所に神仏像が祀られることで、町全体が夥しい数の神仏で満たされているという状況が生まれている。大量の仏像が醸し出す一種異様で霊的な雰囲気も篠栗の大きな特徴である。

一方、現代の都会人に憩いを提供している篠栗の豊かな自然環境は、宗教的な環境としても優れている。篠栗は谷あいだけに清冽な水が到る所に流れ出しており、こうした清水を利用して滝行場を人工的に設営する札所は多い。樋で札所の境内へと水を引き、それを高所から落とすことで滝とする。それは滝行ができる人工施設であるが、同時に自然でもある。実際に滝で修行する巡礼者ももちろん少なくはないのだが、至る所に滝が流れ落ちる清々しい雰囲気に心惹かれて霊場を訪れる人々も多い。

明治時代の交通と経済の変化は篠栗霊場に活況をもたらしたが、戦後の特に高度経済成長後の交通と経済の変化は逆に衰退をもたらしている。昭和40(1965)年に鉄道が延びて城戸駅ができてからは、総本山で第1番札所の南蔵院を起点に巡礼する人が多くなり、南蔵院や奥ノ院、呑山観音など、篠栗霊場を代表するような有名で規模の大きい札所を幾つか訪れるだけで「篠栗さんに参った」と語られるようになった。また、道路と駐車場の整備はマイカーによる巡礼を普及させ、自動車巡礼に不便な小堂の札所への参拝が省かれるようにもなった。日帰り巡礼者も増え、宿泊業は軒並み衰退しているのである。

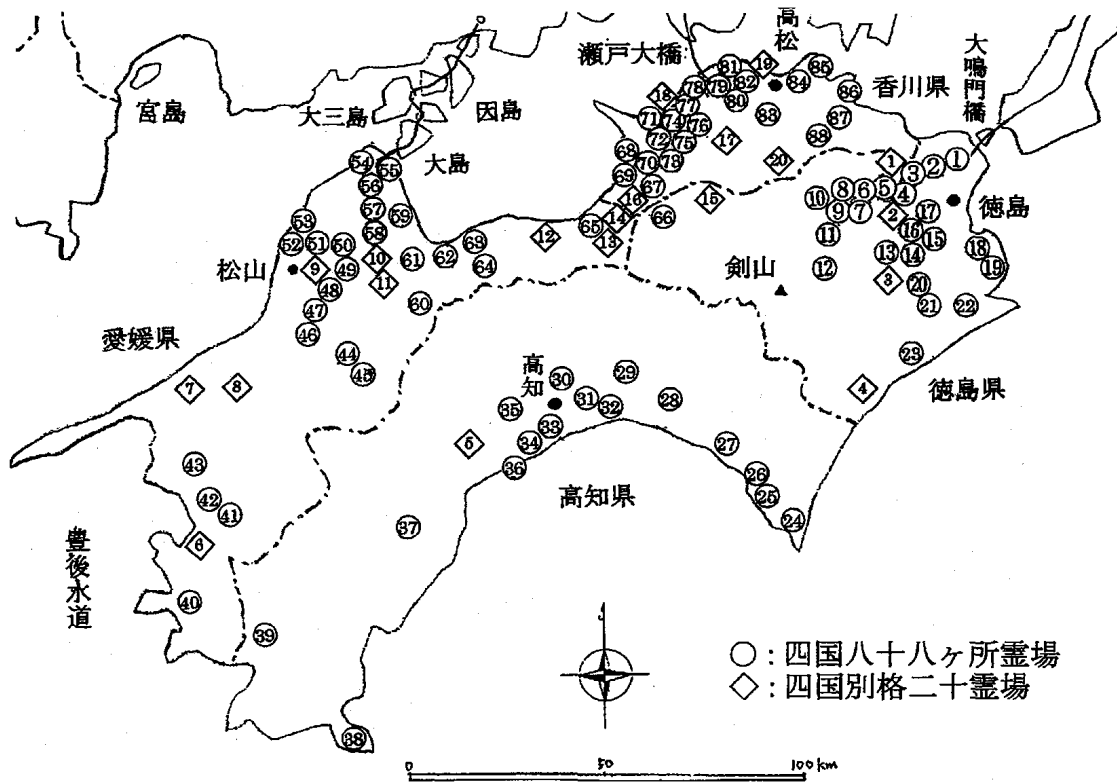


図2 本四国霊場札所分布図

5. 篠栗四国霊場の巡礼空間

(1) 霊場の模倣による巡礼空間の創造

篠栗四国霊場(以下「篠栗」と略記する)は150年の間に実に様々な設計および活用の展開を見せてきたわけだが、その歴史の中で篠栗はオリジナルとした本四国³⁰をどのように模倣してきたのであろうか。まずは、巡礼の空間ともなっている、札所の集合体としての霊場に関して、本四国との異同をマクロレベルで検討してみたい。

篠栗は88ヶ所の札所の完成をもって開創となったわけだが、この88個の拝所を巡礼の対象とする点は本四国と全く同じである。本四国と新四国の歴史において88は絶対的な聖数と言ってよいだろう。呼称にも「篠栗四国八十八箇所」(Wikipedia)など「八十八」の表現がしばしば用いられている。当然「四国」という表象はあらゆる機会に明示されており、道

表 2 本四国霊場札所一覧表

札番	寺号	本尊	札番	寺号	本尊
1	霊山寺	釈迦如来	45	岩屋寺	不動明王
2	極楽寺	阿弥陀如来	46	浄瑠璃寺	薬師如来
3	金泉寺	釈迦如来	47	八坂寺	阿弥陀如来
4	大日寺	大日如来	48	西林寺	十一面観音
5	地蔵寺	勝軍地蔵	49	浄土寺	釈迦如来
6	安楽寺	薬師如来	50	繁多寺	薬師如来
7	十楽寺	阿弥陀如来	51	石手寺	薬師如来
8	熊谷寺	千手観音	52	太山寺	十一面観音
9	法輪寺	涅槃釈迦如来	53	圓明寺	阿弥陀如来
10	切幡寺	千手観音	54	延命寺	不動明王
11	藤井寺	薬師如来	55	南光坊	大通智勝如来
12	焼山寺	虚空蔵菩薩	56	泰山寺	地蔵菩薩
13	大日寺	十一面観音	57	栄福寺	阿弥陀如来
14	常楽寺	弥勒菩薩	58	仙遊寺	千手観音
15	國分寺	薬師如来	59	國分寺	薬師如来
16	観音寺	千手観音	60	横峰寺	大日如来
17	井戸寺	七仏薬師如来	61	香園寺	大日如来
18	恩山寺	薬師如来	62	宝寿寺	十一面観音
19	立江寺	延命地蔵	63	吉祥寺	毘沙門天
20	鶴林寺	地蔵菩薩	64	前神寺	阿弥陀如来
21	太龍寺	虚空蔵菩薩	65	三角寺	十一面観音
22	平等寺	薬師如来	66	雲辺寺	千手観音
23	薬王寺	薬師如来	67	大興寺	薬師如来
24	最御崎寺	虚空蔵菩薩	68	神恵院	阿弥陀如来
25	津照寺	楯取地蔵	69	観音寺	聖観音
26	金剛頂寺	薬師如来	70	本山寺	馬頭観音
27	神峰寺	十一面観音	71	弥谷寺	千手観音
28	大日寺	大日如来	72	曼荼羅寺	大日如来
29	國分寺	千手観音	73	出釈迦寺	釈迦如来
30	善楽寺	阿弥陀如来	74	甲山寺	薬師如来
31	竹林寺	文殊菩薩	75	善通寺	薬師如来
32	禅師峰寺	十一面観音	76	金倉寺	薬師如来
33	雪蹊寺	薬師如来	77	道隆寺	薬師如来
34	種間寺	薬師如来	78	郷照寺	阿弥陀如来
35	清瀧寺	厄除薬師如来	79	天皇寺	十一面観音
36	青龍寺	波切不動明王	80	國分寺	千手面観音
37	岩本寺	阿弥陀如来(※)	81	白峯寺	千手観音
38	金剛福寺	三面千手観音	82	根香寺	千手観音
39	延光寺	薬師如来	83	一宮寺	聖観音
40	観自在寺	薬師如来	84	屋島寺	千手観音
41	龍光寺	十一面観音	85	八栗寺	聖観音
42	佛木寺	大日如来	86	志度寺	十一面観音
43	明石寺	千手観音	87	長尾寺	聖観音
44	大寶寺	十一面観音	88	大窪寺	薬師如来

※薬師如来・地蔵菩薩・不動明王・観音菩薩と併せ 5 仏を本尊とする。

標には「阿波国」などと本四国との国別の対応までをも刻むものがある³¹。

加えて、本四国の88ヶ所の各札所から移植した聖なる土砂（御砂）は、基本的にウツシた札所の番号を基準に一対一で対応させて篠栗の各札所へと配されたと推定され、本四国の実体的な一部分が篠栗の部分となって霊場を構成していることになっている³²。

本四国では鯖大師や十夜ヶ橋など番外札所への巡礼も併せて行われており、歴史的に番外は増殖する傾向にあるが、その霊場推移も篠栗には見られる。ただし現状においては本四国以上に雑多で盛衰が激しく、本四国において番外20ヶ寺で四国別格二十霊場会が構成されたような固定化・独立化は見られない。

霊場における番外の存在という視点からは、篠栗へは「奥の院」「十夜ヶ橋」「鯖大師」のウツシが確認できた。本四国では巡礼の後（または前）に、弘法大師が入定していると信じられている高野山奥の院（和歌山県）へ参拝することが近世から見られる。篠栗では巡礼の途中で参拝する人が多いが、篠栗の奥の院も旧若杉村という旧篠栗村とは行政区画上距離を置いた聖地となっている。ただし、奥の院以外は札所の境内に祀られているにとどまり、独立した番外の札所を構成している訳ではない。

各札所の連なりは、本四国では1番札所を起点に札所番号順に巡る³³ことができるように配置されているが、篠栗の札所配置は開創当初から番号順ではない。先の番外乱立状況とこの非番号順札所配置は、他の新四国と比較しても、篠栗の大きな特徴として注目すべき点である。

本四国をはじめ、小豆島や知多の新四国では、札所は番号順に海岸付近に配され、全体として大きく円環を成す空間構造となっている。しかし篠栗では、地形が島や半島でないとは言え、旧篠栗村領域の縁辺（山沿い）に配するなどの工夫はなされておらず、谷の中心を流れる川の近くに多くの札所が集まっている。本四国の四百八十八里・1,200 km という道程へ

の縮小対応も見られない。

(2) 拝所の模倣による巡礼空間の創造

次に霊場を構成する個々の札所についてミクロレベルの模倣を見ると、そこで最も重要な位置を占めるのは本尊と弘法大師である³⁴。そして各札所本尊の尊格類型は本四国での同一番号札所における本尊と全く同一である。

ウツシ類型の極小型が本尊を基本とする³⁵ことから、慈忍が篠栗の新四国開創にあたり、まず本四国の本尊を石に刻むことから始めたことには相当の理由がある。慈忍が実際に本四国の各札所との交渉によって各本尊の分霊を個々に勧請したかどうかは明らかでないものの、同じ姿と該当する番号を刻むことで同じ神仏の霊を降臨させようとはしたのだろう。

現在も多くの札所が札所番付に対応する本四国の該当札所と名前を同じくしているが、かつては全札所が同一であったと思われる。

また、篠栗の各札所には弘法大師像が祀られているが、これは本四国各札所の境内にある大師堂を模している³⁶。

(3) 儀礼の模倣による巡礼空間の創造

巡礼の空間は、祀られる神仏や構築される事物だけではなく、そこで繰り広げられる人々の行為によっても創造される。すなわち、本四国における営みを模倣することで、新四国を創造することも可能なのである。巡礼する側および巡礼される側にとっての新四国巡礼の意義という観点からは、本四国という巡礼空間そのものの模倣よりも、本四国という巡礼空間における巡礼の模倣のほうが重要なかもしれない。

実際、少なからぬ巡礼者が、本四国の巡礼者と同じ、白ずくめの出で立ちである。白衣の代わりに白い笈摺を着する場合もあるが、それとても本四国と同じである。

また、篠栗を巡るにはさほど杖を必要としないにもかかわらず、本四国と同じ「金剛杖」を儀礼用具として携行している。

巡礼者が奉納する御詠歌は、札所番付に対応させて本四国と同一である。ここから本四国へ奉じる御詠歌の練習としての巡礼という側面も生じ、本四国との関係は一層緊密となっている。

札所の巡り方も、1番ではなく33番から打ち始めることが推奨されているとは言え、全体として右回り（右邊）に円環を成して一周し元へ戻るという構造を、現実の札所の分布状況に対してかなり無理な設定をすることで、本四国の踏襲を果たしている。

篠栗の巡礼者が各札所において行う納経や勤行、御詠歌、納札、賽銭、献灯などの儀礼は基本的に本四国に従うものとされており、独自性は見られない。

納経した証として巡礼者が各札所で朱印（納経印）を受けられるのも本四国と同じである。宝印を中心に右上へ札所番号印、左下へ寺印を押し、中央に墨書または黒印をなす朱印の形式も本四国の形式を踏襲している。

篠栗でかつて盛んであったという接待や善根宿も本四国にならった習俗と考えられる。

(4) 思想の模倣による巡礼空間の創造

儀礼の模倣による巡礼空間の創造が可能であるのと同様、思想の模倣によっても新四国は本四国を模倣することができる。そして、本四国巡礼における思想の大きな柱を成しているのは弘法大師信仰である。本四国は弘法大師が修行して成立した道であると広く信じられているのである。

大師信仰の模倣は篠栗でも顕著である³⁷。「同行二人」や「南無大師遍照金剛」は本四国の根本思想とも言われるが、篠栗の巡礼者は着用する白衣や笈摺をはじめ携行する金剛杖や頭陀袋など、あらゆるところにこの文

言を明示するばかりか、各札所での勤行などで何度も繰返し口に唱える。道中や宿での雑談、筆者との会話の中にも頻繁に登場する。「南無大師遍照金剛」は弘法大師への帰依を、「同行二人」は目に見えずとも弘法大師が常に巡礼者とともに行じていることを、それぞれ意味している。もう何年も篠栗巡礼を重ねているベテランになると、こうした思想はすっかり内面化されているようである。

高野山から招来した南蔵院という寺格と林覚運という僧侶、西義観による弘法大師一代記の幻燈上映、43番への高野山教会の設置、若杉奥の院の札所化なども、大師信仰の模倣という文脈で理解することができる。

篠栗でも本四国と同様に巡礼者のことを「遍路」「お遍路さん」と呼んでいる。道標にも「へんろ道」とある。このヘンロという言葉には「辺境地の道」「辺鄙な道」というニュアンスがあり、弘法大師が本四国の修行で嘗めた苦難の意味も込められているようだ。篠栗では多くの札所に滝行場が設置され、巡礼者による滝行が盛んであるが、これも弘法大師の修行精神にならうものと、巡礼者たちには感じられているのかもしれない。

また、本四国には「関所」という思想があり、19・27・60・65・66番などが関所寺で、不届きな巡礼者はここで御咎めを受けるという思想が見られるが、篠栗でも16番と番外「奥の院」(はさみ岩)が関所とされているほか、19番も特別な霊験があると信じられている。ただし、本四国で険しい道を指す「遍路ころがし」という表現は、篠栗にも幾つか難所があるものの、未見である。

篠栗は全体の空間が一つの「面」として「こころのふるさと」や「仏の里」「霊場」として喧伝・認識されているが、これも本四国全体が「いやしのみち」や「死国」「ヒーリングアイランド」等と表象されることにヒントを得ていると思われる。

6. 模倣による巡礼空間の創造

(1) ウツシ巡礼の構成原理

篠栗における本四国の模倣過程においては、霊場全体や各拝所、儀礼、思想について本四国の数々の重要な側面が構造化され導入されていたことがわかったが、それらウツシの創造的な手法・形式を構造化された本四国の特質に即して改めて整理し直せば、次の4つのウツシが巡礼空間の構成原理になっていると考えられる。

①実体的存在のウツシ

藤木藤助や世話人らによる篠栗の開創・創設過程の中心は何よりも、本四国からの「御砂」の勧請・移植であった。全国各地に創造された数多くの新四国でも、御砂は開設の過程でなくてはならないものとして扱われてきている。同様な例として小規模なウツシでは本四国の各札所が授与する「御影³⁸」が移植されて用いられることも多い。

②不可視存在のウツシ

篠栗の発願者・慈忍が着手した事業は本四国各札所本尊の造顕であり、それが本四国の分霊勧請を意味した。札所はもとより篠栗各地の路傍・山中に祀られる弘法大師像も、本四国信仰の根幹を成す弘法大師の神霊を宿していると考えられている。それらの遷された神仏霊は、台風の目のように静かだが、巡礼空間の設計・運営過程の中核を成している。

③象徴・儀礼のウツシ

篠栗は本四国から、88という聖数、「四国」や「八十八」の表現、番外の存在、札所名と札所番号との組み合わせ、といった象徴をウツシているほか³⁹、白衣・笈摺・金剛杖・御詠歌・右回り・納経・朱印・接待・善根宿といった儀礼をもウツシている⁴⁰。これらはいずれも上記①②を彩るウツシである。

④精神のウツシ

篠栗に見られる弘法大師信仰、「同行二人」「南無大師遍照金剛」、高野山信仰の導入、巡礼者をヘンロとする理解、修行の精神、「お咎め」信仰、「面」としての「霊場」観念などは、本四国の「心」のウツシであり、人々の思惟が浮き彫りにした本四国の根本精神の反映である。上記①②を支え、人々による現実の巡礼という行為を根本から支えるウツシである。

そしてこれら①から④のウツシ原理は、2(1)においてウツシの含意として挙げた「移し」「遷し」「写し」「映し」という民俗分類にそれぞれ適合させることができるのである。

「移し」とは対象となる事物をそのまま、あるいは分割して他の場所へと持っていくことで、ウツシの文脈で言えば、オリジナルを構成するモノ（存在）を移動させることである。移植される現実の物体が、聖性の定着するアンカーとなることで、聖性が移転するのである。近世に富士山のウツシである富士塚が構築された際にも、クロボク（富士山の熔岩）の移植は非常に重視されていたし、現代でもルルド（フランス）のウツシを創造する場合には当地の泉の聖なる水が移されている⁴¹。

「遷し」も基本的に上記「移し」と同じ意味だが、「遷座」「遷宮」「遷化」などの表現を鑑みるに、本尊仏や祭神など特別に尊いモノの場合に使用される傾向にある。後白河院の勧請した新熊野神社（京都市東山区今熊野）を「洛中にも三所のうつし」⁴² とする「うつし」は「遷」がふさわしいだろう。

「写し」は、「写真」「転写」「描写」との表現もあるように、オリジナルの通りのカタ（形、型）に似せて別のモノを模造することを意味する。直接的・機械的な複製の含意がある。オリジナルの再現・真似にはカタを象徴するシンボルや儀礼が利用され、ウツシ巡礼では特に数のシンボリズムと演技性が重視されている。日本では武道や芸道でカタを尊重し、その道では何よりもカタどおりであることが求められ、修験道でも金峰山への入峰を模倣した「国峰」が全国各地の地方霊山において営まれた。

「映し」とは、光を当てた反射によって目に見える模像で、オリジナルを異なる空間へ投影することを意味する。人間が精神の光で照らし出す世界のウツシは本質的かつ人間的である。こうしたウツシがオリジナルを喚起させる作用は一般に「見立て」と呼ばれている。

(2) ウツシ巡礼の意義

篠栗は「移」「遷」「写」「映」という構成原理によって聖地として創造され、巡礼空間として成立したわけだが、そこには大きく3つの段階が見て取れる。

まず篠栗は、本四国の霊場全体と各拝所の構造を「移」「遷」すことで、「新四国」という聖なる空間となった。次に、この新四国空間において、巡礼者や守堂者たちが本四国の象徴と儀礼を「写」すことによって、巡礼者は新四国巡礼のコスモスに浸れるようになった。そして、本四国の精神を「映」すことが、巡礼空間と巡礼行為の聖性をより濃密なものとし、仏教による救済というより大きなコスモロジーを背景としながら、新四国へ巡礼するという動機を強く促した。

以上のように、ウツシという模倣によって本四国の持つ強力な聖性が喚起され、聖性を持たない場所にも本四国に準じた巡礼空間（聖地、霊場）が比較的簡単に出現し、巡礼や接待といった活用の実践が促されるのである。つまりウツシという空間を設計・運営する手法は、単なる空間にもオリジナルの聖性を立ち上げて巡礼対象たりえる聖地へと仕立て上げることができ、また、その手法を重ねることで、その聖性は濃く・強く・密になってくるのである。

ただし、模倣による巡礼空間の創造はあくまでも模倣に過ぎず、ウツシ巡礼で本四国巡礼と同等の「効果⁴³」が得られるものではないことは、多くの巡礼者にとって自明なことと思われる。したがって、新四国巡礼には、本四国巡礼の完全なる代替行為としてではなく、独自の意義が見出されて

いる可能性がある。

そもそも本四国を勧請した創設者たちは、その超自然的作用による地域の安寧を期待していた。また、新四国は常に本四国を喚起させることから、地域の人々が外へと旅立つ重要な契機となったようだ。創設当初は地元篠栗の人々も自ら巡礼した可能性があるが、それは本四国巡礼の擬似体験かつ予行演習とも言える。

一方、篠栗の巡礼者には一生に一度の思いで巡る人が少なく、多くはそれほど遠くない地域に暮らす人々が年中行事として手軽に巡っている。難行ではないので、女性や老人、子供も巡礼する⁴⁴。巡礼者にとってウツシ巡礼は、本四国の聖性によるリフレッシュ⁴⁵、レクリエーションの満喫、レジャーや消費行動、信仰心の涵養、法悦などを身近に求める場となっている。

ところで、彼らの来訪が促す接待や善根宿は、とかく閉鎖的になりがちな地域共同体において生活圏を超えた内外の人的交流を生み出し、情報や技術を交換する開放的な装置となっている（コミュニケーションの創造）。

以上のように、信仰集団や地域共同体は、年中行事として巡礼や接待を営むことで、定期的に連帯感や信頼感を育むことができるのである（コミュニティの活性化）。

人々はウツシという空間デザインの手法を駆使することで、既存の無秩序な自然状態の環境を文化的な巡礼空間へとアレンジし、ウツシ巡礼活動をマネジメントすることで、これらの効果を生み出してきた。地元を巡礼させるというコンセプトは、先人たちが開発した人間力活性化・地域活性化のシステムを構成する一つの柱であった可能性は非常に高いのである。

参考文献

- 浅野清編 1990 『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版
池田暁子 1998 「聖地内巡礼—ミニチュア巡礼は『うつし』か—」『宗教民俗研究』

8号 日本宗教民俗学会

- 磯崎 新 1991 『見立ての手法 日本的空間の読解』鹿島出版会
- 井上 優 1993 『篠栗八十八ヵ所霊場めぐり』西日本新聞社
- 植島啓司 2000 『聖地の想像力—なぜ人は聖地をめざすのか—』集英社
- 太田好信 2001 『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか—』人文書院
- 小田匡保 1984 「小豆島における写し霊場の成立」『人文地理』36巻4号, 人文地理学会
- 粕屋郡役所(編) 1924 『糟屋郡志 完』粕屋郡役所
- 金尾宗平 1935 『改訂増補 風土と生活 福岡縣地誌』刀江書院
- 河野善太郎 1984 『秩父三十四札所考』埼玉新聞社
- 合屋武城 1957 『筑前・若杉郷土誌』私家版
- 小嶋博巳 1985 「利根川下流域の新四国巡礼—いわゆる地方巡礼の理解に向けて—」『成城文芸』113・114合併号, 成城大学文芸学部
- 五来 重 1989 『遊行と巡礼』角川書店
- 近藤隆二郎・日下正基・金子泰純 1996 「環境社会システムの移築プロセスに関する研究—写し霊場および地域交流型装置を例として—」『環境システム研究』24号, 土木学会
- 斎藤昭俊 1975 『仏教巡礼集』仏教民俗学会
- 佐々木哲哉 1993 『福岡の民俗文化』九州大学出版会
- 1976 「レポート篠栗新四国」『西日本文化』123号, 西日本文化協会
- 篠栗町文化財専門委員会(編) 1982 『篠栗町誌 歴史編』篠栗町役場
- 1990 『篠栗町誌 民俗編』篠栗町
- 清水谷孝尚 1971 『観音巡礼』文一出版
- 新城常三 1964 『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房
- 1982 『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房
- 真野俊和(編) 1996 『講座日本の巡礼』全3巻(第1巻『本尊巡礼』, 第2巻『聖蹟巡礼』, 第3巻『巡礼の構造と地方巡礼』) 雄山閣
- 田中智彦 2003 「日本における諸巡礼の発達」頼富本宏(編)『聖なるものの形と場』国際日本文化研究センター
- 中尾 堯(編) 1973 『古寺巡礼辞典』東京堂出版
- 中山和久 2000 「巡礼と行場の関係—篠栗新四国霊場を中心として—」『山岳修験』25号, 日本山岳修験学会
- 西海賢二 1997 「北海道における石鎚信仰とミニ霊場」『石鎚山と瀬戸内の宗教文化』岩田書院

- 西 義助 1982 『ささぐり くらしの四季』私家版
- 平幡良雄 1993 『篠栗遍路―筑前の霊場めぐり―』満願寺教化部
- 1976 『篠栗八十八ヵ所―筑前の霊場めぐり―古寺巡礼シリーズ6』札所研究会
- 星野英紀 1986 「民衆的宗教エネルギーの磁場 “篠栗八十八ヵ所霊場”」『九州・篠栗霊場の旅―弘法大師の世界―』読売新聞社
- 1984 「新四国霊場の展開過程―福岡県篠栗霊場のばあい―」『宗教文化の諸相』山喜房佛書林
- 南石 武(編) 1968 『粕屋要録』史跡保存同好会
- 柳田國男 1993 (1931) 『明治大正史世相篇』講談社学術文庫
- 山本宝隆 1973-80 「笠と杖」『広報ささぐり』125～218号 篠栗町
- 読売新聞社出版局・宗教考現学研究所(共編) 1986 『九州・篠栗霊場の旅―弘法大師の世界―』読売新聞社

-
- ¹ 本稿で扱う「巡礼」とは数十箇所にも及ぶ一連の複数聖地を巡る旅であり、メッカ巡礼や伊勢参りなど単一または少数の聖地へ赴く旅を除いた狭義の巡礼である。その狭義の巡礼において巡るべき多数聖地の連合、すなわち民俗語彙では一般に「霊場」と呼ばれるものを、本稿では「巡礼コース」と呼ぶ。
- ² 関東地方や東北地方などの人々から一般に「西国」と呼ばれた、和歌山県・奈良県・大阪府・京都府・兵庫県・滋賀県・岐阜県にまたがる地域に散在している定められた33ヶ所の寺院を巡るコース。以下「西国」と略記する。西国を巡礼することは一般に「西国巡礼」と呼ばれる。
- ³ 徳島・高知・愛媛・香川県の四国地方に散在する指定された88ヶ所の寺院を巡るコース。以下「四国」と略記する。四国を巡礼することは一般に「四国遍路」と呼ばれる。
- ⁴ もちろん、時代の変遷とともにその都度新たな現在の意義が見出され続けているがゆえに、現状が成り立っていると考えられることもできる。
- ⁵ 日本における狭義の巡礼の特徴として、巡礼に赴く先々の寺社へ願意や氏名を書いた札を納めていくことがある。この行為を「納札」と呼ぶ。そのため、巡礼対象となる寺社は、納札をする場所であるという意味から、一般に「札所」と呼ばれている。
- ⁶ より詳しく言えば、日本文化における聖性の説得力、聖性の論理。
- ⁷ 日本では「模倣(imitation)」が美学・美術史学で頻繁に用いられてきた歴史があり、「ある存在や在り方を模範として、それに倣うこと。および、その結果として生み出されるような模倣関係と模倣そのもの。」といった観念が民俗語彙の中核にあることは否定できない。また、近年は偽ブランド品の横行によって法律用語としての模倣も日常語化しつつあるが、これは採用していない。不正競争防止法等では、商品の形態が同一であるか実質的に同一と言えるほど酷似し

ていることを模倣（模造品、偽物、イミテーション、フェイク）と解するが、ウツシ巡礼において酷似は認められない。なお、社会学者ガブリエル・タルドの説いたような、世界を覆い尽くす差異と反復の力学としての「模倣」概念〔ガブリエル・タルド 2007 (1890)『模倣の法則』河出書房新社〕も採用していない。

- 8 本稿ではウツシ巡礼を主題とするため、祭礼や参詣など狭義の巡礼以外の分野に見られるウツシについては考察の対象から除く。また、海外のウツシ巡礼については今後の課題としたい。
- 9 キリスト教の信徒は、キリストの受難という行為の模倣を通じて、キリストの人生全体における精神に近づこうとした。
- 10 模範となる存在や在り方。原型。本元。原本。本物。模倣の対象。ある類似表現を誘発させた刺激。本稿では西国や四国の巡礼コース。
- 11 もう一つ念頭に浮かぶのが「現（顕）シ」である。目に見えない世界がこの現実世界に出現するという意味で、カクリヨ（幽（隠）世）に対するウツシヨ（現（顕）世）という表現などで用いられてきた。伊勢を現（ウツシ）国とするのに対して、熊野を幽（カクレ）国とする信仰もある。しかしウツシ巡礼において、この「現シ」の意味が含まれている可能性は低いと思われる。
- 12 比叡山では千日回峰行を終えた行者が仏前に止観し巡礼の行程を思い出していく営みを「運心回峰」と位置づけている。記憶を辿り、心を運ぶことで巡礼を成すのである。
- 13 以下、便宜的に西国巡礼のウツシを「新西国」、本四国のウツシを「新四国」と記述する。なお、新四国の巡礼者の間では、模倣の対象とした四国八十八ヶ所霊場を、単に「四国」と言うのみならず、オリジナルであることを強調して「本四国」と言うことも多い。これは「本西国」という表現が極めてまれであることと対照的である。
- 14 三十三所の観音巡礼として成立した西国の中心観念である 33 という数は、『法華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」（観音経）に説く、「仏身」から「執金剛神」に至る計 33 の応現身に基づくと考えられる。すなわち観音菩薩は求める人の立場に応じて様々に姿を変えて現れ、救いをもたらすという信仰である。ここに直接依拠することで、西国巡礼のウツシとしてではない三十三所観音巡礼が成立する可能性がある。例えば 1932 年に発足した新西国霊場は、名称や 33 ヲ所という札所数（聖数）にウツシを直感するものの、実際の開創意図はウツシではない。
- 15 2 の (2) で示したウツシ類型の①に該当する。
- 16 明治期までの開創で主な新四国は次のとおり。太田（茨城県）、因島（広島県）、邑久郡（岡山県）、加陽・都宇・窪屋三郡（岡山県）、御厨（静岡県）、平戸嶋（長崎県）、讃岐国（香川県）。
- 17 4 の記述は、明治 28(1895) 年建立の記念碑文（80 番札所境内にある）や、明治 41 年に終了した調査をもとに著された『糟屋郡篠栗村々是・完』と『糟屋郡誌』、西義助による聞き書きである『ささぐり くらしの四季』、南蔵院住職林家に伝わる話〔南石 1968: 360-362〕、『篠栗町誌 歴史編』、および、筆者が 1998 年

- から断続的に実施してきた現地調査に基づいている。
- 18 巡礼者数 100 万人は本四国の 10 万人に比してかなり多いのだが、ともに推測や宣伝を背景とした公称値であり、実際は篠栗も本四国も年間 20 万人ほどではないかと言われている。
 - 19 山手には五塔ノ滝・鳴瀬・中ノ河内・田ノ浦・御田原が、山王には荒田・平原・丸尾・岡部が、城戸には郷ノ原・二瀬川・松ヶ瀬・大久保・小浦・桐ノ木谷が、萩尾には呑山が、それぞれ含まれる。
 - 20 およそ 10 年に 2～3 組は無理やりに札所番号順で巡礼する人々がいるという。
 - 21 もともと城戸には安徳帝を奉じて逃れた七騎の平家落武者伝説があり、それに基づいた命名と思われる。
 - 22 88 番の守堂者である桐生さんによれば、代々暮らしている小字の名が大久保であったがゆえに大窪寺を受けたのだという。既存の地名にオリジナルを見立てた勧請である。
 - 23 既存の地形にオリジナルの景観を見立てた配置は 27 番でも見られる。本四国 27 番・神峰寺が高い峰の頂きにあるのと同様、ウツシの 27 番もやはり高い山の中腹に安置された。
 - 24 篠栗では「御砂」「御土砂」「霊土」などと表現される。
 - 25 もっとも、浄土宗については珠林寺が 15 番を境内に祀るなど、敵対的とは言えない。
 - 26 現在の篠栗町における城戸・山手（山王を含む）・上町・中町・下町・新町の各地区が近世期の篠栗村を構成していた。明治 22 (1889) 年には村政施行によって金出・高田・萩尾の 3 村と合わせた篠栗村が成立する。
 - 27 寺格のみの移転。当時は新寺建立が容易に認められなかったため、高野山僧侶の仲介で名義だけの古寺を移転改称するという手法が九州各地で用いられていた（瀧光徳寺など）。
 - 28 奥ノ院は、明治期の地図には直接の巡礼ルートに入られていないが、本四国の御礼参りとしての高野山詣でと同様、打ち納めて後に登った可能性も捨てきれない。
 - 29 6 番の扁額は明治 14 (1881) 年に博多中堅町の人が奉納したもの。
 - 30 新四国のオリジナルである四国八十八ヶ所霊場と、同霊場で展開される巡礼行為（一般に「四国遍路」と呼ばれる）とを包括した概念。
 - 31 現在、本四国では巡礼で経過する 4 県を発心・修行・菩提・涅槃の道場として位置づけることが広く知られているが、この表象が近世期に用いられていた形跡はなく、戦後の創造である可能性が高い。
 - 32 土は大師の足跡と解する向きも多いが、四国において土砂が、遍路道からではなく、基本的に各札所本堂の床下から採取されていたことや、新西国でもしばしば土砂が勧請されていることから考えて、札所（神仏の示現所・拝所、聖なる本尊の安置所、弘法大師の修行所、など）の聖性の移転と考えてもよいだろう。
 - 33 この札所番号を順に増していく方法は、本四国では、札所番号の順序に従って順に札所を「打つ」（＝巡る）ということで「順打ち」と呼ばれる。

- ³⁴ (1) で述べた「御砂」(聖なる土砂) も重要なのだが、行方不明となっている札所が多いことから、各札所における聖性というよりはむしろ篠栗という霊場全体の聖性を担っていると考えられる。
- ³⁵ 本稿 2(2)①を参照。
- ³⁶ ただし、本四国の歴史において大師堂は 17 世紀段階では幾つかの札所にしかなかった。大師堂がすべての札所に揃うのは近世半ば以降と見られている。
- ³⁷ 大師信仰の模倣という意味では、創造される巡礼コースは新四国ばかりではない。日本各地には、名古屋二十一大師霊場や越後二十一ヶ所霊場、伊予府中二十一ヶ所霊場など、21 ヶ所の札所を巡礼する二十一大師霊場が創出されている。この聖数は、弘法大師の命日が三月二十一日とされることに依拠している。
- ³⁸ 札所の本尊を印刷した紙片。「御姿」とも呼ばれる。
- ³⁹ 以上は 5 (1) (2) を参照。ただし「言霊」のように言葉に聖なる存在を見ているのであれば②の不可視存在のウツシということになるだろう。
- ⁴⁰ 5 (3) 参照。
- ⁴¹ 他に熊野の榎(ナギ)や伏見稲荷の杉、高野山の榎(マキ)などの植物も勧請の過程で移植されることがある。
- ⁴² 喜多村信節 1830『嬉遊笑覧』に見られる表現。
- ⁴³ 霊験や御利益、功德などの超自然的効果のほか、脚力や血行、爽快感、達成感などの自然的効果をも含む。
- ⁴⁴ 本四国巡礼は、その過酷さゆえに、各地で成人儀礼に用いられた。
- ⁴⁵ 日常生活で蓄積した諸々の疲労や罪障を洗い流して元気を回復すること。ちなみに、篠栗が山間部に展開しているという特徴は、本四国の模倣の結果ではないが、山野の跋涉や森林浴など大自然に包まれることで清まるという本四国と同様の効果を生み出していると考えられる。